

# 朗読詩指導の問題点

— 中学校国語科単元「朗読して味わう」より —

樋 口 昌 一

これは、過日大阪市立天王寺中学校で開催された全国国語教育講演ならびに協議会の席上研究発表した論旨をまとめたものである。

I 川のゆくえ

枯れ草のかけ 小石のうえ

ぼくらが毎日わたる

橋の下を流れて

大きな大きな川になるのだつて

いくつかの村を通り

いくにちかの旅をして

川しもは海になるのだつて

そこには大きな町と港があるのだつて

ここは山の分教場

ぼくらは山の子

六 木 実

山をながめながら 雨の午後  
先生は遠い国の話をしてくださいました

ああ ぼくらの知らない海

にぎやかな大きな町

ぼくらはいつかいくだろう

川をくだつて

ぼくらはいつかみるだろう

ほんとうの海を

II し か

午前の森に しががすわつている

そのせなかに そのつこの影

弾道をえがいて

あぶが一びききとんでくる

はるかな 谷川をきいている

三 好 達 治

その耳もとに

III からたちの花

からたちの花が咲いたよ。

白い、白い、花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。

青い青い針のとげだよ。

からたちは畑のかきねよ。

いつもいつもとおる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。

まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。

みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。

白い、白い、花が咲いたよ。

北原 白秋

これらの詩は、いずれも表記した単元の表題「朗読して味わう」に取材されているものである。わたしはこれらの詩に対して、単元の趣旨をできるだけ忠実に実施しようと考え、詩型、韻律、その他

内容、語句の説明などはだいたい生徒に自由研究の課題として与え、同単元にある内藤濯氏の「もの言う術」を本詩朗読指導の導入に利用した。つまり、I、II、IIIの詩を朗読中心で、鑑賞理解させ、生徒の情動的感懐を高めたいと意図したのである。尤も、これからの掲示するデーター作成を前提に、このような方法を採用したものでないことをことわつておきたいと思う。そうして、少くともこの調査は、その評価を前提としたものであつた。

A表 (対象 250人)

生徒の好んだ詩の率	人数	割合
(I)の詩	108人	42%
(II)の詩	69人	28%
(III)の詩	72人	29%
不明	1人	

A表は朗読するということ考慮に入れず、ただ単に、好きだという詩を三つの詩の中から一つを選ばせた比率である。

さらにこの生徒の選んだ詩に対して、どの程度生徒は理解していたかを同時に調査したところ、B表のような結果が出た。

B表

理解率	人数	割合
(I)の詩	69人	64%
(II)の詩	62人	69%
(III)の詩	31人	49%

この理解度は、朗読する作業を念頭においていたので、その詩自体を如何に把握していたかを中心にした。すなわち「1、明かるい気持ちであらわれている」「2、もの静かな感じがする」「3、さびしいような気持ちがある」の三項目を設け、三つの詩がその内の一つに該当するようにしたのである。もちろん、この三項目は、詩の配列と同じ順序をもつて正しいものと考えたが、本来ならば「理解」と言うより「感じ方」と言つた方が妥当であるかも知れぬ。しかし、この場合は前述したように、朗読上欠くこと

のできない基本的理解を眼目にしたのである。

次に、生徒には自由選択のかたちで、この三つの詩の内、前記の「好み」にこだわることなく、その一つを朗読させたので、二百十名の朗読した生徒を対象に選択の比率を調べ、あわせて朗読に際してその詩を選んだ理由をも調査した。その結果がC表である。

C 表

詩の別		(I)	(II)	(III)
朗読した比率		42%	39%	19%
選んだ理由	思った	17%	14%	33%
	好んだ	76%	47%	60%
	かみや思ふが	(2%)	30%	(2%)
	かみや思ふが	2%	1%	0
	すれ	0	0	0
	不明	2人	5人	2人

(表中に括弧をしたのは当をえていない選択理由を示す)

以上、A、B、C各表を中心に究明してみよう。

A表～B表について比較検討してみると、朗読するということを度外視して、生徒が好んだ詩はIの詩であつた。にもかかわらず、この詩を好んだ生徒が、実際にその詩題を把握した率は、その中の過半数をややうわまる程度に過ぎなかつた。しかも、その事実とは対照的に、A表でIIIの詩とはわずかパーセントの差ではあるが、少くともこの表では最低の率を示したIIの詩を、B表の理解率では

ほとんどが、その内容を掴んでいたのであつた。さらに問題は、IIIの詩について、三つの詩の中で理解の点で最も低率を示したことをも取り上げることができる。このような三つの現実的な疑問に對して、わたしは次のように解釈したのである。

第一点の(I)の詩に對しては、この詩情にもられた主人公(ぼくら)の位置が、同じように学校の生徒であるというところに、好みの最高を示したものであり、理解の点での低下は、都会と山村という地域的な観点の相違からきているのではなからうか。つまり生徒の憧憬する主観的な面での誤差が、この詩に對決した生徒の思考を混乱させたのであると思う。そうして前者とは對照的な(II)の詩が問題となつてくる。この詩の好みの低さは、さきにも述べたように、(III)の詩と大差はないのであるが、(III)の詩に對する観点とは、やや趣きを異にしている。(II)の詩はその詩の単純な詩型の中に、一見理解の困難さを視覚の上で感じたにちがいない。これは生徒としてもつともなことであろう。そのような一目見た詩の外観性が、生徒の好みを低率にしたわけであつて、実は、まじめにこの詩に對処していつた生徒にとつては、「弾道」ということばの理解だけによつて十分その詩情を認識することができたのであつた。それは要するに、(II)の詩が、(I)の詩及び(III)の詩の要求する主観性というものが、ほとんど加味されておらない写生的で客観性を多く包含していたからである。のみならず、簡潔に描かれた場面の想像が、短い詩であることによつて容易であつたからにちがいない。この理由が中学校の生徒として、自主的な理解を助長させたものといえる。これに對し、第三点にあたるIIIの詩は、少くとも主観性を強く要求しているわけで、か

な書きのやさしいような詩でありながら、好みの上でも、ことに理解の面では最下位を示した理由の一つとして上げられる。好みが高率でないことは、生徒がどんなにやさしいように見えても、一応は目を通してこの詩を吟味している事実が認められる。したがって、この詩の理解の低率さはその事実を考慮に入れて、好んだ生徒は「なんとなく好きな詩」だとし、主体性を把みえなかつた者が多くあつたにちがいないと思うのである。

からたちのそばで泣いたよ。

みんなみんなやさしかつたよ。

とくに、生徒にとつて理解に苦しんだ箇所はこれであつた。(Ⅲ)の詩の中核ともいふべきこの一節が、その理解如何によつて詩情を左右する。教師が、大人の心境を助言してやるべき一節である。結局、子供の世界観と、大人のそれとのちがひ、年令的な面での理解のむずかしさが、自主的学習による理解の低率を示したものである。なおまた、その大人の世界観(この詩における)自体を、生徒も一応は認めるが、実感としてにじみ出て来ないところに、もう一つの要因が含まれているような気がする。

こうした事実が、いつそう明白になつて来るのは、朗読に際して示したC表で判然とする。つまり、(Ⅰ)の詩のA表で明らかになつた好みの率が、朗読に際して選択した率とが偶然に一致していることである。しかもその真意を示すようにC表の選択理由も、「大へん好きだつたから」は、他の(Ⅱ)、(Ⅲ)の詩のそれよりも圧倒的にその意図をはつきり述べている。そうして(Ⅰ)の詩を単純に「やさしいように思つたから」といふ漠然とした気持ちでこれを朗読しようと思つ

た者は、わずかに十七パーセントであつたことがそのことを裏づけていると思う。それは文体の平易さと共に、前述したように、この主人公が同じ生徒という位置においてつながる親近性である。この親近感が、(Ⅰ)の詩の持つ山ノ中と、この詩を吟味する都会の生徒との地域的な隔たりや、朗読するという発声上の苦痛を打開させていたものであろう。ただ暗黙の内に三つの詩を読み味わいながら(Ⅰ)の詩を好み、しかも朗読するという一応聴取者を考慮に入れなければならない場においても、やはり(Ⅰ)の詩をためらうことなく選んでいる事実は、要するにこの詩が、あくまで生徒に対して安定した位置にあつたということを見逃すわけにはいかない。

いま、わたしは突然朗読する、という発声上の苦痛と述べたのは、詩情の高抑という面での朗読技巧を含めた表現なのであるが、生徒の朗読に当つて(Ⅰ)の詩が、表記のように多く朗読されながら、実は、読んだ生徒が如何に日本語のアクセントという問題に苦慮しているかがわたしたのであつた、生徒たちは、たしかにここで日本語というもののアクセントについて、新しい認識を持つ契機を持つたのである。生徒はみな標準語とか共通語ということばを知っている。けれども、関西の、そうして大阪人の生徒として、生活言語のアクセントとやや離れたよそ行きのことば以上に、遠いものにぶち当たっていたようであつた。それが同じ地域の、同じ学校の、同じ学年の、そして同じ学級の生徒たちを相手に朗読し、地域差こそあれ、同じ生徒の位置に立つ主人公の親近性によつて、この詩が朗読して味わたる詩として生徒を満足させていつたにちがいない。この事実は、さらに(Ⅱ)、(Ⅲ)の詩について分析していくことによつて、いつそう明

白になつていくであらう。

例えば、わたしの一番注目したのは、(II)及び(III)の詩が最初の好みの率と、朗読に際して選択した率との変動であつた。そしてこの場合、(II)の詩はA表の好みで二十八パーセントだつたのが、朗読するという前提に立つての選択(C表)では三十九パーセントに向上し、これとは逆に(III)の詩は、C表の選択率がA表より十パーセントの減少を示した。つまり、この(II)、(III)の詩における朗読に際しての十パーセントの増減は、少くとも、(II)、(III)両詩の相互間での移動であつたと解釈することができるのである。ここに(I)の詩と比較して、(II)と(III)の詩が朗読するという面で如何に不安定な位置にたつていたかを認める一因として、上げることができるのではなからうか。

実際に、(II)の詩が朗読の前提に立つたとき、上昇した理由を考えしてみると、だいたいちにこの詩が、(I)及び(III)の詩よりも、短い詩であつたことが中心になつている。C表の選択理由の項目から推察しても、「短くて読みやすいから」とする者が三十パーセントを示し、本当に好きだとする者は全体のわずか四十七パーセントという事実からして理解できよう。声を上げて読んで、よい詩だという共感が生徒に対して薄弱だつたように受け取れる。だから、ただ単に簡単に読みおえてしまえると考えたの変動であり、上昇した理由と見られるのである。いわゆる、「その」ということばによつて受けつがれ、詩情が高められている詩であるというよりも、「弾道」ということばの理解によつて、読めるといふ単純さで受け取つた増率にちがらぬ。

そう言い切つてしまつと、(III)の詩が朗読に際して敬遠された理由が、成立たなくなるかも知れないが、(III)の詩においてもC表の選択理由で「やさしいように思つたから」が三十三パーセントを示していることによつて、一応この詩を朗読に選んだ理由の一端をうかがうことができるだろう。尤も、そのことが(III)の詩の朗読を前提とした選択率の減少を説明する材料になるわけでもないし、かえつて意味が逆になつてしまふであらう。しかし、この詩がかな書きの部分が多いことと、二行詩の簡潔さによつて、生徒がやさしいと思ひ朗読に選んだとしてなんの不思議もないのである。すべての生徒が読むという面でそう考えたにちがいない。しかも、一部の生徒の中では小学校の六年で一度習つたという(III)の詩である。それがどうしてこうまで朗読するに当つて敬遠されていつたのであらうか。(III)の詩はここに、問題を投げかけているような気がする。そしてこの問題は、揭示した三つの詩を総合的に究明しながら、解き明かさなければならぬ問題なのである。

(III)の詩は、「朗読して味わう」の朗読上のことからついて問題を提起したのである。それだけに、生徒にとつて(III)の詩は苦痛だつたのにちがいないと思う。つまり、関西の、そして大阪地方のナマリになじんでいる生徒にとつて、その地方色のあるアクセントの方法では、(III)の詩が朗読詩としての情感を満たしていく上に困難があつたところに帰因するのではないであらうか。もちろん、前述したように、生徒と大人という世界観の相違も否定できないが、音声の強弱によつて、詩の美しさ、強さ、明かさ、やわらかさなどを打ち出そうとしている詩なのである。

例 アオイ、アオイ、ハリノトゲダヨ  
アオイ、アオイ、ハリノトゲダヨ

右は太字が強音を意味するが、この後者の部分が関西の地方的アクセントに通じるように思う。だが、この場合の針の鋭さ、強さは前者によつた、音声の上から打ち出すことができるのである。こういった場面は、この詩のいたるところで見出すことができる。(Ⅲ)の詩は、右のように東京語に近いアクセントを要求していると共に、最も強く朗詩技巧を求めている詩であると言えるかも知れない。生徒はそれを考慮に入れていたのである。だからこそ、Ⅲの詩を好みの中で選びながら、朗読に当つてはⅡの詩へ移動していつた十パーセントの生徒を出したのであろう。また、その反面Ⅱの詩が、見たところカタイような詩でありながら、短くてしかも自由律の詩型がアクセントの要求を僅少にしているというところにも、ひきつけられた要因を見出すことができるようである。そうするとⅠの詩はどうなるのか。(Ⅰ)の詩の場合も、求めるならばⅢの詩と同様アクセントについての考慮も見出すことができるが、仮りに「海」を「ワミ」と読み、「川」を「カワ」と読んでも、生徒は生徒として、おのずから実感を誘うものが朗読する生徒の口からほとぼり出て来る。それはアクセントのそれよりも真実味のあふれた声として、受け取ることができたのである。わたしは(Ⅰ)の詩を朗読に選んだ生徒の七十六パーセントが、「大へん好きだつたから」という理由を示しているのを高くかつてやりたいと思う。

したがつてⅢの詩が朗読する面で不振であつたことは、生徒のほど遠い世界観と、アクセントによつて、少くとも敬遠されたわけ

あり、このことは、生徒が朗読詩に対して、切実なむすびつきをどこかに求めようとしている事実を物語っているのである。地域的な環境、地域的なことば、生活的な位置など、生徒の実体にふさわしい親近感の要求である。真実にそくした正しい言語、美しい言語はこうした親しい朗読詩の中からも認識されていかなければならないと思う。こんにちの生徒は情操的な面に欠けているところが多い。これは少くとも、生徒がむすびつこうとする欲求にほど遠いものがあるからにちがいないのである。例えば、関西の、上方ことばの、そうして大阪弁の中に、いつたどれだけの詩的要素があるのか、こうした究明もまた判然としていない。このように生活的にも、地域的にもなんらかの意味でつながる作品を通して、情操的な一面も打開され、真実性のあることばが打ち出されていくであろう。朗読詩の生徒の動向を調査しながら、わたしは生徒と共に世が渴望する朗読詩の啓発をうながしたのである。

\* 本論の教材「中学校国語」下一(学校図書刊行)

(二二頁より)

いとしみふかうなつかしきほとなるをいと、心くるしけにしましてのりたまひぬ」の「心くるしけにしまして」は、諸本では「心くるしけにしみたて」「心くるしけうしみせて」「心くるしけにしみせて」「心くるしけにしみせしたて」などの異同が見える。このやうな独自本文は、今後の本文批判に、新しい示唆を与へるものと考へる。

(昭三〇、一一、二六稿)  
(昭三一、三、一一補)

昭和三十年年度卒業生論文題目

竹取物語考 浅井省吾  
 石川啄木研究 池田弘  
 梁塵秘抄に於ける一考察 井上隆  
 太宰治論 岩崎太  
 鳥崎藤村論 内海弘  
 川柳の研究 采尾幸  
 森鷗外論 岡本正  
 武者小路文学について 大槻照  
 小林多喜二論 奥野靖  
 石川啄木論 加藤秀  
 太宰治論 荻谷三  
 伊勢物語についての一考察 川口昭  
 島崎藤村研究 上村保  
 西鶴の一考察 北川正  
 志賀直哉研究 北村雄  
 尾崎紅葉研究 木内雄  
 一葉論 北川明  
 藤村「新生」の一考察 黒川明  
 方丈記研究 黒川明  
 永井荷風論 黒川明  
 樋口一葉の研究 黒川明  
 堤中納言物語の一考察 小柳甲  
 志賀直哉論 小泉悟  
 夏目漱石論 小泉悟  
 太宰治論 芝田忠  
 啄木研究 鈴木榮  
 夏目漱石論 砂田朗  
 宏夫

芥川龍之介論 谷口卓  
 啄木研究 曾田卓  
 北村透谷論 高木章  
 北村透谷論 谷口稔  
 山本有三「女人哀詞」の一考察 谷口卓  
 田山花袋論 竹田美  
 林芙美子研究 田中啓  
 堀辰雄論 友中啓  
 北村透谷研究 内藤康  
 宮本百合子の一考察 長瀬政  
 尾崎紅葉論 羽場和  
 愛媛県喜多郡地方の方言 藤本悦  
 石川啄木研究 古谷将  
 芥川龍之介論 星野一  
 読本について 松室干  
 田山花袋の研究 松室干  
 児童文学の研究 松室干  
 石川啄木論 榊井謙  
 森鷗外研究 水嶋貞  
 宮沢賢治論 村上憲  
 落窪物語の研究 森田男  
 志賀直哉論 安田男  
 二葉亭四迷論 横田男  
 西行入寂地考証 米住保  
 夏目漱石論 渡部敏  
 夏目漱石研究 中野義  
 泉鏡花論 宇山卓  
 近松世話物の一考察 林代治

黒島伝治論 黒島伝治  
 樋口一葉論 樋口一葉  
 二葉亭四迷研究 樋口一葉  
 樋口一葉論 樋口一葉  
 田辺福磨研究 西鶴町人物の研究  
 夏目漱石論 夏目漱石  
 漱石研究 夏目漱石  
 鳥崎藤村論 鳥崎藤村  
 夏目漱石論 夏目漱石  
 芥川龍之介研究 芥川龍之介  
 永井荷風論 永井荷風  
 高山樗牛論 高山樗牛  
 長塚節論 長塚節  
 夏目漱石研究 夏目漱石  
 石川啄木論 石川啄木  
 泉鏡花論 泉鏡花  
 中原中也論 中原中也  
 式亭三馬の一考察 式亭三馬  
 森鷗外論 森鷗外  
 能の一考察 能の  
 南山城地方の方言考 南山城地方  
 石川啄木論 石川啄木  
 木下幸文について 木下幸文  
 蜻蛉日記の一考察 蜻蛉日記  
 立正安国論私考 立正安国  
 夏目漱石の一考察 夏目漱石  
 島崎藤村論 島崎藤村  
 立原道造研究 立原道造

岡崎虎昭 桑村茂良 今井道明 原田俊美 加藤正雄 重谷芳雄 太田喜司 平田康滋 種田勝一 西村一勝 野田一成 安田和生 片島之秀 清水正秀 杉浦常治 天条博文 西原恒雄 藤原恒雄 南川一也 藤本清治 本多恒子 三島達子 山本達子 大江静子 大江山子 嵯峨誠一 中山スミ子 中野日出夫 野村日出夫 川望